

繪本拾遺信長記

前篇

五

特別
73
2507
5



印 遠
號 2507
卷 23-5

繪本拾遺信長記初篇卷之八

目録

川分口籠岸両砦合戦之事

柴田勝家勇力

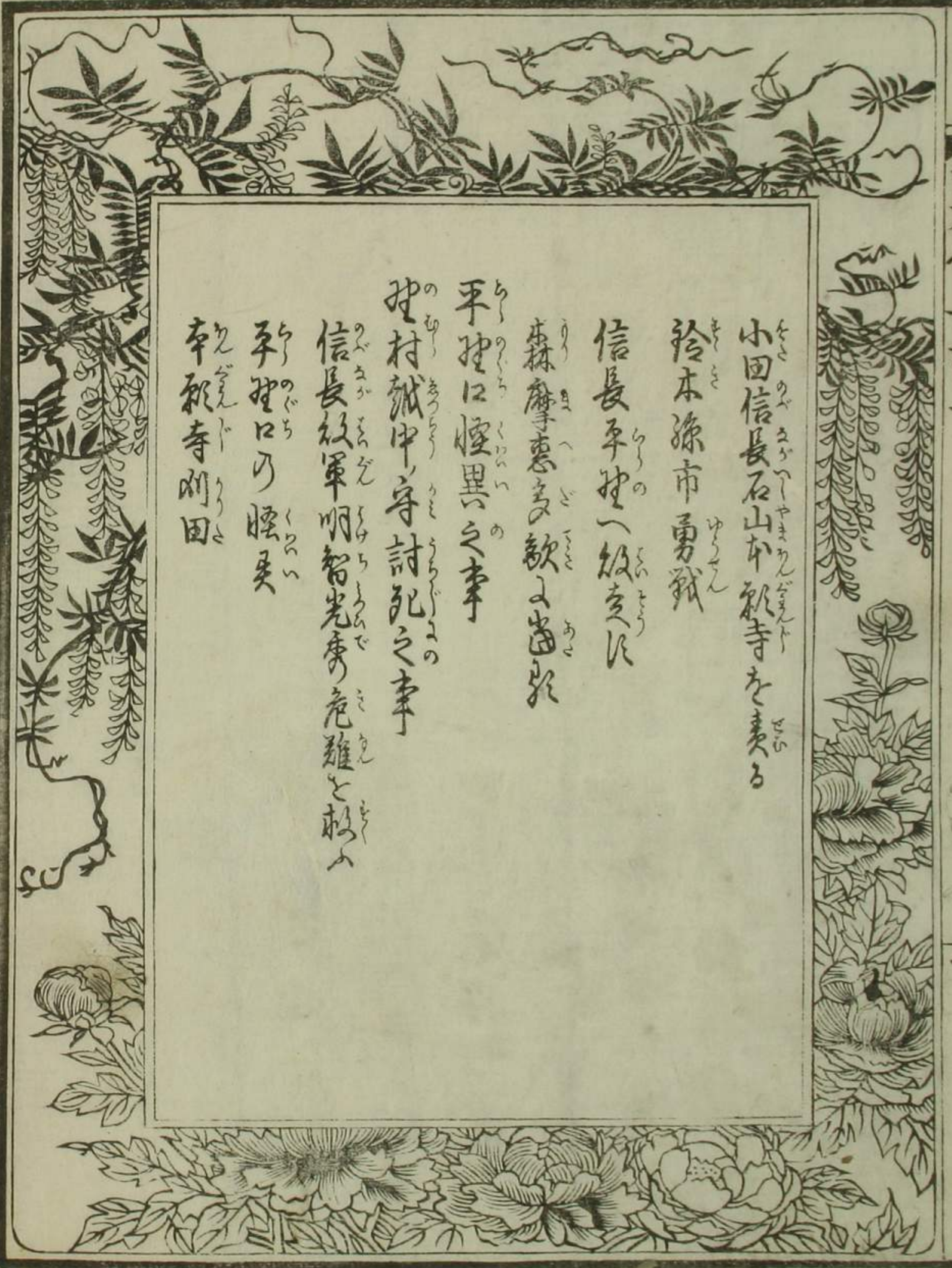
勝家歎の雜兵と拷問に

依り成政勇戦

攝州石山合戦之事

堀本小大膳討死

信長陣と中津へ移る



小回信長石山本願寺を去る

鈴本源市勇哉

信長平持へ致す

森藤孝多致す

平持に怪異之事

村越中守討死之事

信長故軍明智光秀危難を救ふ

平持口の怪異

本願寺別回

繪本拾遺信長記初篇卷之五

川分口籠山岸両世合戦之事

小回彈正忠信長御高水のる陣平兵衛しるひさる夜討
を近らとるき丘は南無妙法蓮華經の大巻とまさせ級軍を
集めとる小庭を築る者多しとて討死候は十余人
三好勢の夜討せし体より何れは何れは鬼神の形なり
物なり乃仕業とて怪しむ者も多しなり附よけ本回證し即
勝家信長の御意に事言はしる其時夜討を陣(近所)
と款方の軍配は出合船場分とらふおとしあ中して難三
人を捕何ものもに属せし者ぞと尋て人の三好勢は人の
としく本願寺の門後より白状及びい年意時夜の強劫を

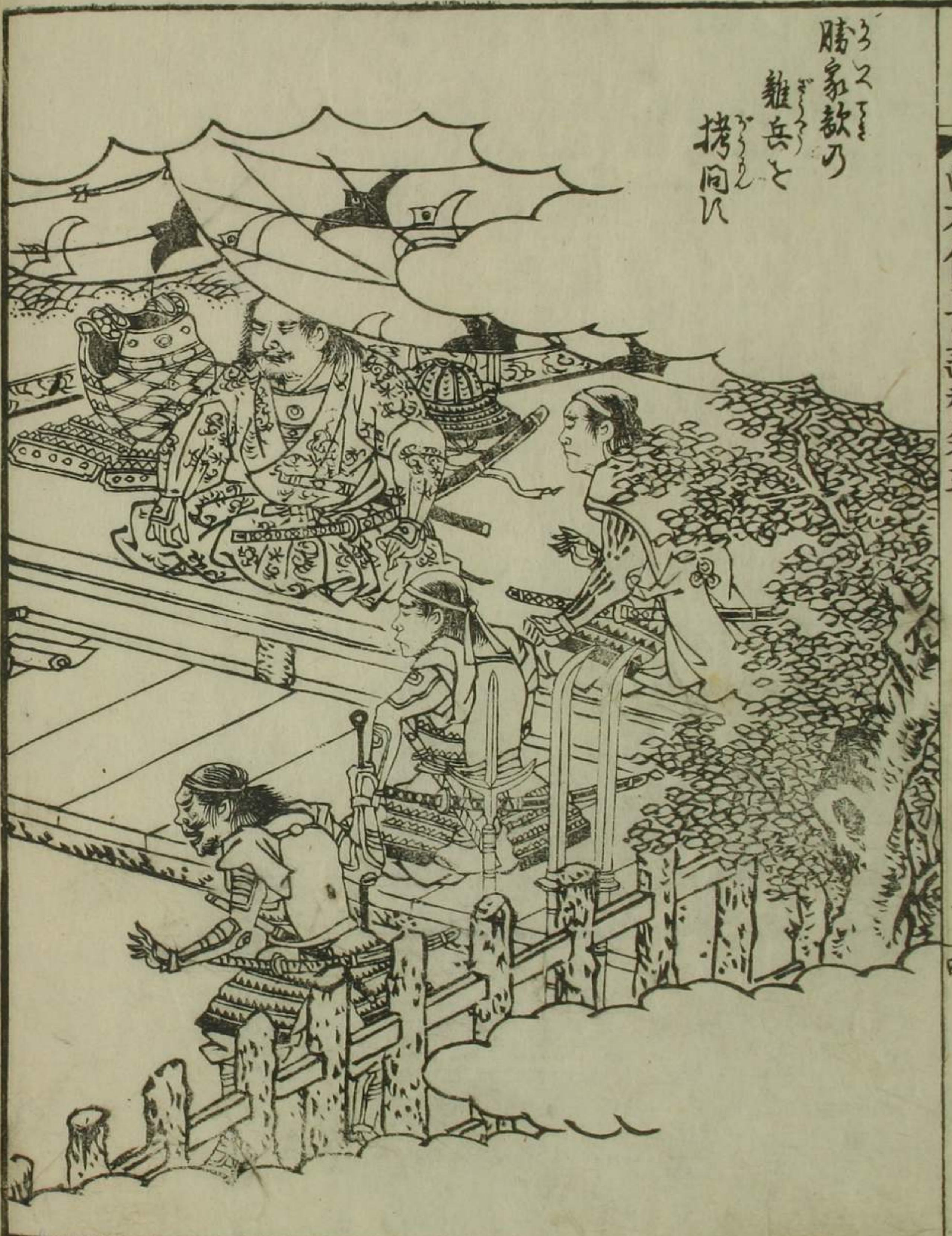




柴田勝家
加勇

慶信坊之の如くが不ぬるとい悪き本願寺のふりまひ是より
 本願寺(勢)と向られ御征伐せられしと申する信長はて大具徳
 女うぬのをすりのる板本願寺の悪徳者三好の一黨に合
 許し御軍に敵討せりとて是ゆるぞ今申すに難しとて門徒
 退治の由あり及ひるが信長は右と看て昨日近郷の者々を
 陣中より来り境を越えおぼせし百姓を今又陣中より
 居るや探見よと申せしとてこれに御軍平九瀬門不破河内守
 と書く陣中と求むとて此の人の百姓一人も居りはいと申す
 長歎じて我日素本願寺と悪むゆゆしと申す又是と申す
 小兎の解きとてく將んせしと誰り計ん如坊まかくまは
 謀計とゆいんとい是渠が門徒の内は軍勢ありて本願寺と

助ると是(一)征伐延引せば申しき難儀及び我御軍を二
 りに分ち一は柴田勝家と大おぼし三好が御田後徳の勢
 を責め我自ら一は孤引て本願寺よりけ責めははしとて
 既よおと申知あるを津村俊遠は宿陣せし播州勢退く
 進進)たる本願寺と申す人のあはれとて進て築山とて川分
 の城(本願寺より)御軍とて申す大おぼしして其勢九三
 計に方を圍んで責めたる其意あり又籠山守のけは(本願寺
 と大おぼし)是れ軍兵三三計は時よ押よせは今合戦中
 なる又御加勢賜るべしと申すきつて若来る信長は是を再
 尋るき川分は勢岸の味方たるの要害は後詰して坊守と
 申す人々も御軍多政九瀬門多之同信盛を以即九瀬門村依



勝家敵の
 難兵と
 拷問人

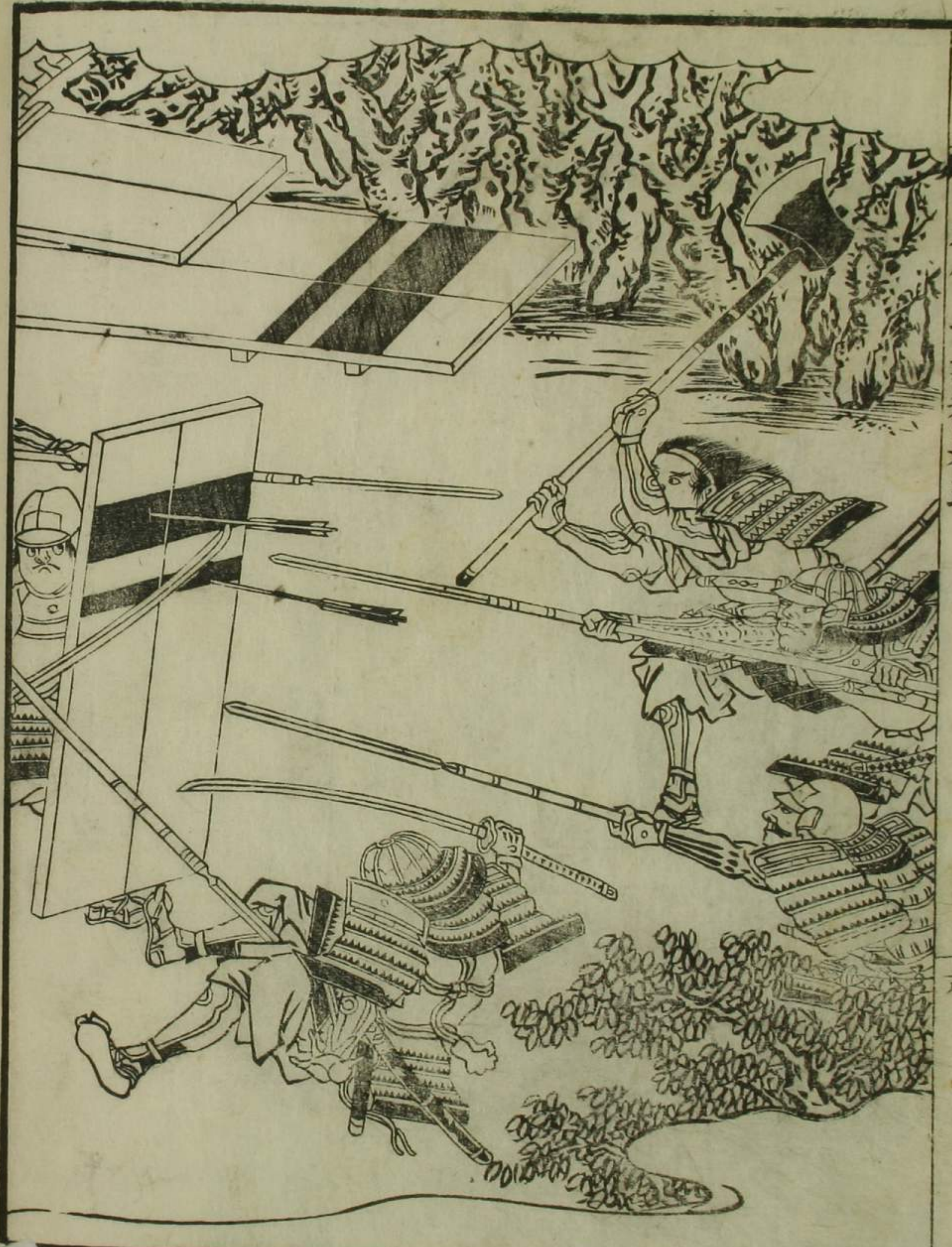
後守等も二万余人の軍兵とあり西燃と後活せしむ叔もいひし
 川分口の岩に在る石置物杭の内務女堀本小大膳佐藤は
 唐門なるも三百人籠城せし石山勢三万余人いさくと押寄せ
 砲をおつけ柵と倒し逆原本と引のけ生記知るは又妻より
 堀と守る大石佐内務女堀政の大膳石款の勇兵うれば中
 幸の一撥系何程のさう仕出さん切て出さ蹴散せし堀兵又
 百余人と引つけ堀本小大膳とありとも堀戸と開きて激き
 出舞りし中と巴の多し又字に物也れがし
 いさしおまの太勢体人あけくさ丁計引りたるけより大
 お常樂寺大さ小堀りきたるき者ともがありこまうる款を
 小勢ぞ鉄砲とそおとあひるむ不人槍入とよとあまのめり下

知らる小ぞ三万余りの鉄砲の筒先と探へ押並べ八方一討り
 火蓋を切ば先進し堀兵百余人をさしと打倒され長し
 堀本小大膳は鉄丸と命と落し佐藤は政を足と毛髪皆
 逆よまより三尺余りの大ぬの槍さしとあまを死雷光乃
 ごとく飛り向くまうく内よ十又六騎を亂して突ふせし
 堀兵は又方と堀と踏込し志のぞと削り發ふおと小島分
 美奈中と刀又よりの籠岸の岩に順真寺三万余騎とて押
 堀竹葉と堀りし志のぞと美よけ堀の大お輪系後
 守一徹老練はたしり勇吉れが堀の横間又数百挺の鉄砲を
 かけりし款と美は引よせし門と一日又打敵ら砲煙の沸る中
 より門を開きて切て出さまくまきり立てし門引入又鉄砲

我足勇 政威之佐



圖大書美巴力卷五



圖大書美巴力卷五

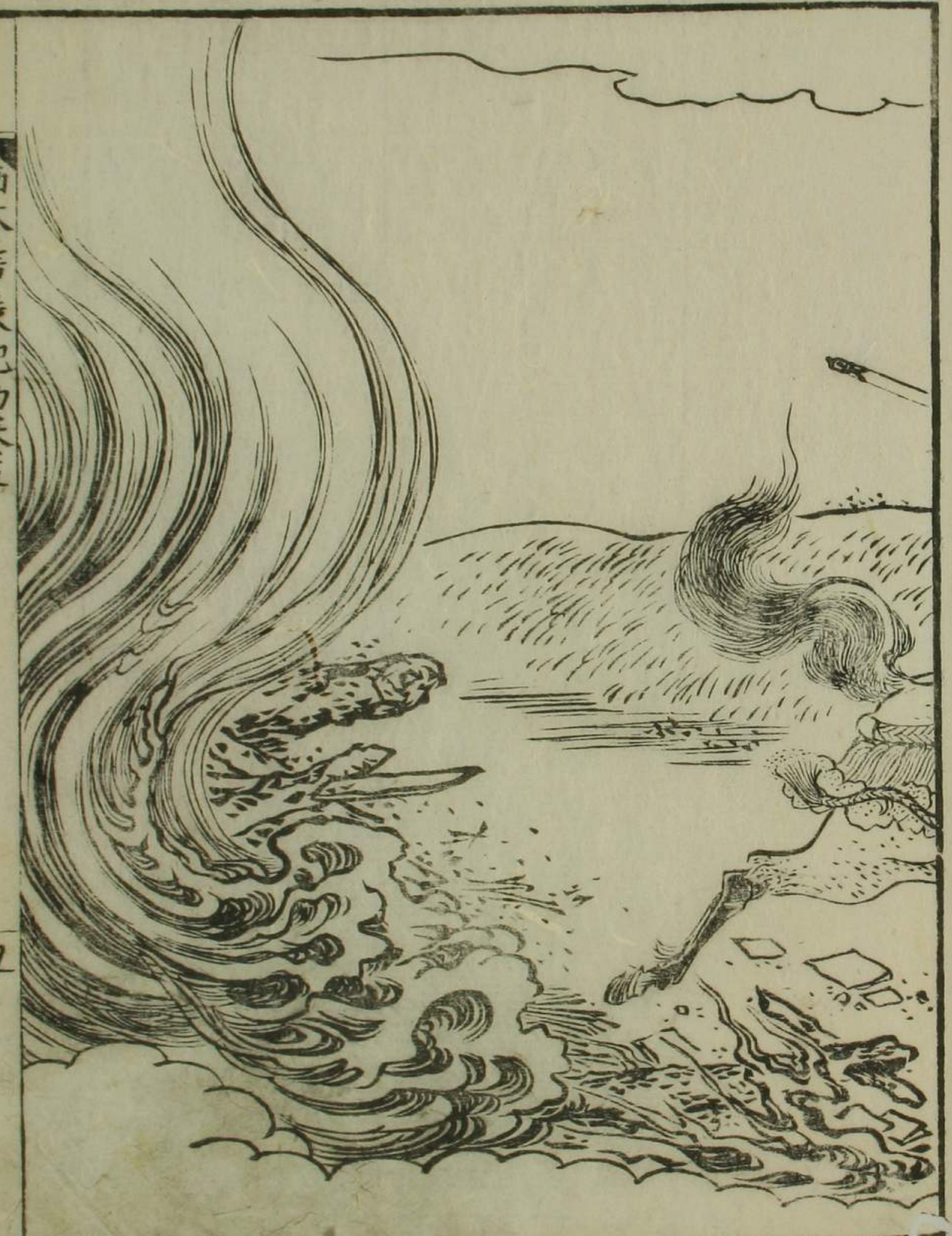
て折あつは二討計の合れと交は勝負の久くさうりけとき
 信長ふの後信の勢摩惠多々久間を林一万余騎と二百
 五ヶ川分口と勢岸又二文字に押来りあひの後より圍と作
 討てくれは城中より逃しく切て出じ獲て斬立ぬ石山
 勢とんぐ又討たれ兩城とも又圍と解き本願寺にし
 引移を逃じ若と小田の大軍隊を亂して七八丁追討る小
 忽ち一寺の鉄炮耳下に響くと逃しく下難波今宮の本林の中
 南無不可思後光如来と書する九宮の大旗又十余流風うひ
 うせ殺万騎の石山勢圍と作り鉄炮と放らうけ小田勢の後と包
 と雲霞のどく押まりは小田方のゆ士先とんぐ扱は本願寺方
 も軍勢をばし向けるそ二回て出て追殺せとてさけ軍又別

つる勇士摩惠多々久間を林福系依くが輩傳人と三股引
 分前後又當り左右に突立喚き叫んで戦ふ石山勢も急
 ぐ又佛教を殺して法慈と附せよと叫り斬をも突て厭
 ひうく入乱とて戦ふとぞ兩軍死傷の者殺と知りはけ討日
 も西ふに傾き又も大雨條を亂しと降来とは戦も是を
 とく相引と物より逃し少と東へ引るなり

攝州石山合戦之幸

相しけ討川分口勢岸へ向ひう後信の勢信長郷の本陣
 攻り合戦の次討つまびうふ小云とて城本小大膳討
 上は信長いよく勝りさらば先本願寺とて圍と
 又其後三好と征せんそ二万余騎と柴田勝家と

西本吉長記力家五



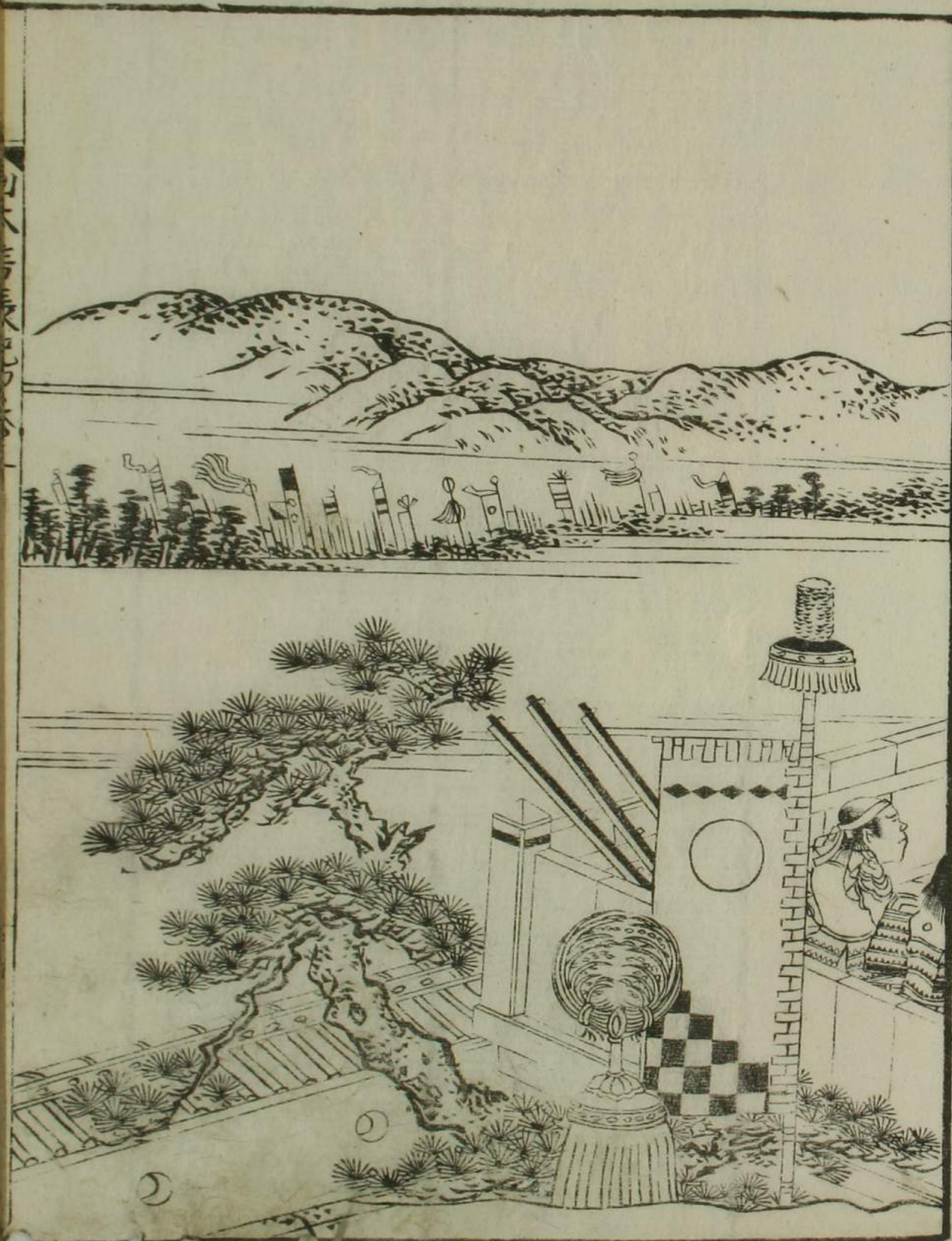
討死

小堀大之助

本

て野田福徳の三好勢よりしり自に万余人の大軍を率し元
 龜元年九月十八日中津川の船橋を相渡り本願寺の東樓
 並村を経て天王寺に陣を布けおに石山美の分と空
 め次第をまりりて押寄せたる石山の地形と謂ひ西を
 暖くたる大海より潮邊後辺大川の岸を洗ひ人馬の往来
 しづく小の方又渡川の清流横たり六國の水師合せり東
 より大沼ありて敷里より葛原大和川を中と取り流し翼を
 てい道考かじし南一方の平地に續き石山彼素の正面とせりは
 又信長少の方中津の陣より南乃方天王寺より軍勢と
 相まはし石山とせりおらんとは實の石山の要害天王寺一
 城地なり板も信長の先陣を計多屋三郎林佐渡守共上り

助後高平丸湯門村三十郎湯原甚女等一万余人本
 願寺の柵際へいしくと押寄せ岡の勢を天地を動かし門きつて
 美上りけ耐城中の軍兵も岡の勢を合せは移りかへて居り
 ろるが珍本寺幸よせむの矢に又あつて城をとりてしり
 ろせの堀の狭間を倉くしあけ並ぶる鉄炮の筒先と揃へて
 又大門と打出せばおらふしりしり例る武者の基例又する
 陣脚乱れしり計略をとりは耐をいふとるを幸う指揮す
 陸い珍本線市門後の道年六百余人若後引は門を閉
 り流軍の流る居りしり美一文字又突入るを力凡烈しくしり
 斬落しよせむの大軍勢を恐るに又計略崩れ
 珍本線市遊る款と追てはしりしり勢と引上げ門と固め



守るるぞ勇しうりるるるまひたり信長先陣の軍利ありと見
 るいよく怒り後陣の備人をり出 自來配とあり攻敵と信
 し只一のこも美治よりけりにもむ軍おすは摩志多政九門
 毎家明智十兵衛光秀多之同右衛門尉信登森三九門尉
 屋又即九門長秀の氏家也陸入道卜令伴好俊守守武
 一万のみ余騎信長の軍配も配さす持備竹束と四門さす意の
 考と合せ美よりるるい今もやけ構へ臨らんといふと母をりし
 け附日光西山又沈と霄園のいと晴るれば合戦の明日と定め攻めと
 二丁計退き無火駿しく焚つけ軍威と示してを美に付は城
 中より一考の狼烟をお上げ雲中又懸懸て見分るがに方八面
 弘夢の徳とつとるし抑うくと問の考を聞き後り冷しく空へ

ろろ小田の軍兵といひり小と勢き見れば猪飼丘の後より教子の
 松明と灯しつと勢の多しり人々怖ども雲霞のどろく小田勢の後
 をを切夫と飛し鉄炮を放ち喚き叫んを討てくる是ハ幸幸が
 下知をうけ美宗寺と龜井六郎を両大おとし二万余人を率し
 懼伏せしがお國を刃をくあの子の核を結ぶよとのり信長是と見
 て中じくも謀計と構しとの哉一揆系の伏兵何れどのりや西
 ん勢を引まけ討破と烈しく下知ある間もけりせは惣城門
 を活と開き本願寺末寺又おひく勇猛の名とけりてつて坊
 教恩寺若後寺蓮生寺を首とし交家の武士は鈴木孫市
 郎山名内記三林周防守多松三之丞下同右道等と大おとし
 二万余人の大軍と率し國の夢山川と勢揺し小田の備と美三ツ



小田信長
石山本
秋寺と
美作



突破り當るを幸ふ切まり後より志原寺龜井即後炮と
 飛んや急雨のどく皆夢く又佛款と討て法忍と殺せしと鳴り
 くおまよは小田勢大軍とくとも前後の款も不意を討て
 進退とまきお術とまひ熱軍兵をまきくもひく又遊移と
 門後の軍兵得たりかじと槍先と搦入突まき大お信長今
 ち叶じとまひ難奉の兵と引て西南の方へ迎せし又附後と
 士は摩惠多政九勝門森三九勝門等修又三子余人といひ
 たりけ附款と袖交の以又ぬき月勝く东山又より秋風身
 透りて心かそき小本津難波今宮の村より俄又園をつり
 南五石可思後光如来の大難月報又翻り津田去佐相良長門
 益田一即兵勝等にも余人信長が難中へ教百挺の強炮と打ち

横槍を入り突崩せば信長大き小忍と母の三馬とあて遊移を
 又小田の軍兵八方へ散亂し信長又降せせる兵二百余人といひ
 たり信長の道もまき畠の中と近らまらるが何所へあゆんとい
 りの方をき門と門にたるる南を里小野勝岡の村く又松明
 の光射遠い園の夢もやのゆへるふいふく驚き馬の口と東向
 平野の御(遊移)るが突まは依兵乃恐まはらとく又念佛
 して腰兵糧をつくひ飢をたけ留く息を絶不に耳え強炮
 次第天地も崩る計園と焼り石山乃大お栗原右近入百誘
 の道率と下(遊)又念佛寺と又園と信長と討く佛款の根と
 絶せと夢く又罵り啼と寺内へ突入たり小田の勇長摩惠多
 政九勝門森三九勝門主人の沖ちるけ討たりと思ひたれは雨人多

源市
源市
源市



源市
源市
源市

一く本軍の縁側又躍り出れど山門後勢をさへし目
 要きかのと名は次郎兵衛守兵衛の分隊として武部のおはしましは河本
 陣へ脚踏入し令備とはそのはや小田家の勇兵摩惠多政花備
 門本三九郎門は並の宿を見すやとと玉らるる方共向ふかじ
 群すうは石山勢とむらうくと薩側は只共と別は又うら
 討る者三十余人はしと競ひし門後勢むらと一日は迎うるは向
 又摩惠多森の勇士信長を供奉し集うる南とて又ふ丁計
 多り多小西の方より二万余りの軍兵松明より上げ入押来るあり
 さま信長見ると歎息し我武運もよや盡きてしと見ゆるは海軍
 防ぎ交付と歎とては後切んとあつるは森摩惠多の両人を
 を勵しといふ甲斐なき河渡りてこそ少人歎兵何十万人と

ころとも百姓一揆のては門若らあつるは河渡り某兩人は歎と
 退拂ひやさんどろふ道とありて落させ給へと云捨て血は涙
 ころちろふ陸しよせ来る歎と月報は透し刀をいひま先は拵
 の役の簾押立歎ははけで明智十玄信光秀叔軍と集り
 信長卿の河在所と見ゆまじ軍勢之是と見ると信長藤せ世
 心地しと光秀あいつくも集りつるもの哉信長是よりと信長
 又光秀馬より飛りし諸軍とた又万歳を唱へ摩惠多森はこ
 りろとも母のの事と信ひつるはけ附るや夜はかのくとも明
 後道は追軍兵集り来るはじめのどく大軍よあつるわらふ
 石山勢も悉く寺中へ引入ぬまは寺と合戦と懼しけ眼を
 晴さんものと諸勢とまら再中務の本陣へ引たはむら

西本傳書和歌卷



西本傳書和歌卷

信長
平理
級之次





圖本信長言和卷五



森摩多
款
出

圖本信長言和卷五

十七

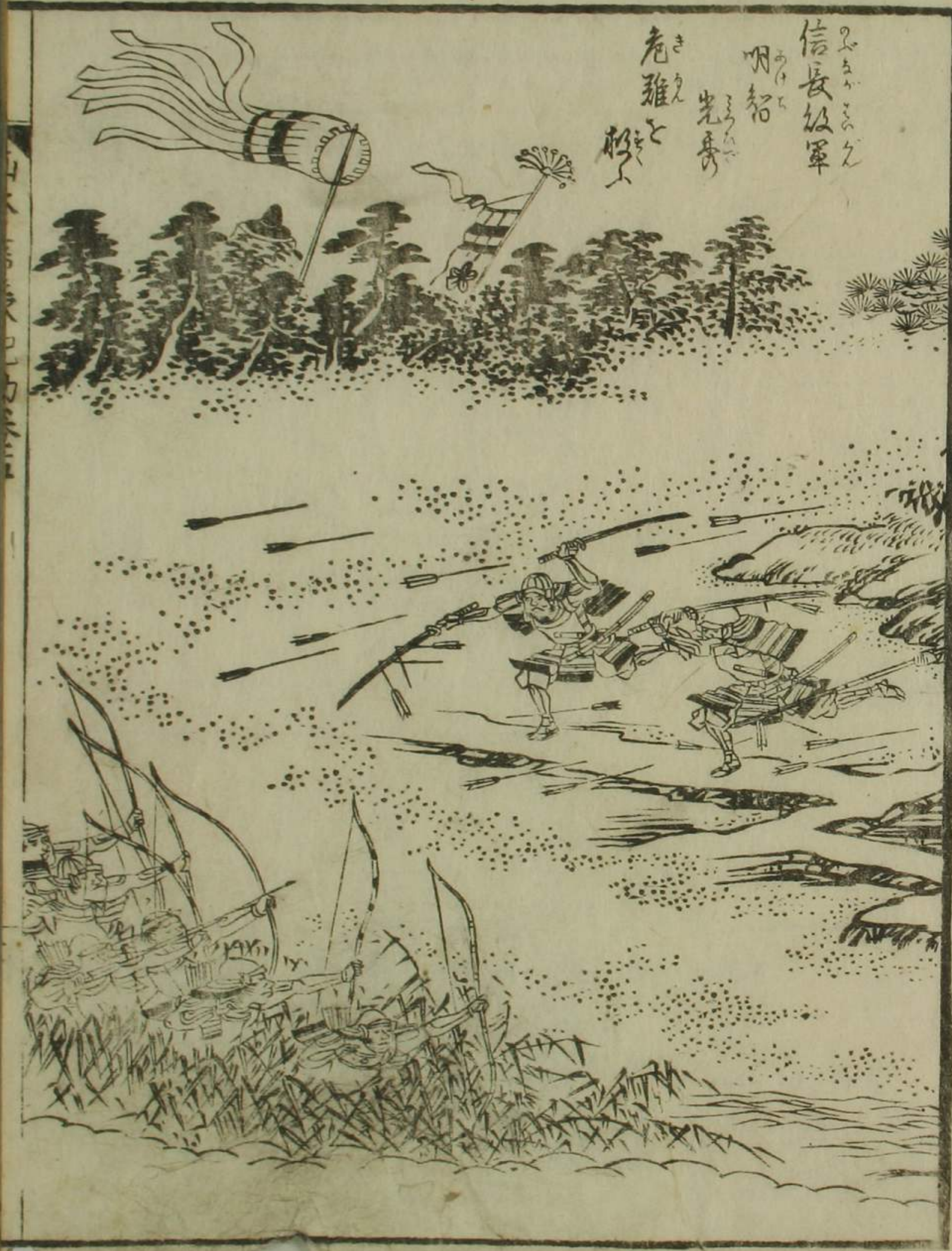
平姓に倭兵を率

安久不思後の中のあたる小田家の勇良を又即左衛門尉村長
 秀頼軍の人をざれよつと心をしても天王寺の東の舎利寺村
 まぐりたるがむ君信長の河杉を是をなりくに勢を引進めし方を
と思ひめぐりつる小平姓村の方より門後勢栗津右近がの軍兵
 南を妙法蓮華の題目とかきし信長卿の大に集ひいこと
 いさんで中教寺に引をを送りしては大き小勢さまむ君信長卿若
 や門後の一探系に討ちや志を移しては大おの河杉と集
 とけよの恥辱やあらむ追うけてはのに集とあらせし暇を取りては踏破りし
 一系に追ひつき向ふのに控めるに六尺余の大男忽然と敗れて
 門後勢の中へ踊り入り彼の題目の大に集めるに難兵となりて押しては七

八回をうり回す中へ扱ひ集めると奪ひいことしるに門後勢大は
 勢をさまむ道にはじとなりて八面へうり集めるに困むとなりしては南の方へ
 交りとなりしては其の勢をさまむ雷光のきつくやは細く散らせし目を止め
 めぐりつるにはじ門後勢大はあらむ人間まがあらむにはじとなりし
 各と巻ひて追うりしるに又は即左衛門の名をさまむの始末をかんて心
 懐くとなりし河杉と奪ひいことしるに三好方の者をさまむにはじとなりし
 追うけて捕まりしるに馬術達者の武士をさまむとなりしては舎利寺と合
 せして追ひつき捕まりしるに徳の安部守の辺りまがあらむにはじとなりし
 是の何の不おもとをさまむとなりしては不思後之をさまむにはじとなりし

中教寺に討ち死す事

中教寺の坊主又は下回安部守は法橋親龍となりし者あり武勇の



信長軍
明智
先鋒
老雅
松



日本信長記卷五

養老と云ふ者之が初は九月の下旬のりたる石山乃東
 口依を造り編く熱しうらぬを寺内へ刈入るし門後乃
 百姓百余人牛馬百餘疋を引て脱る寺中と出るとは珍本を
 幸とて守り急ぎ龍又見へく中々の刈田の事なれども
 當寺兵糧不足はに獨り又寺と出く小田勢又龍籠らま
 造り給ひそと依りたる龍又軍師心を勞し給ふ及
 以我小田勢と見らるる嬰子のに何ぞ海く是と恐るん今編の熱
 たる時又當川く當寺より外えん小田方より刈多く款又力
 を添ふ之我必以之を刈むしと云を幸其いとむくうらぬ
 きて中々の強て出城せんと申し給り豫め隊を添して給ふ
 とく岩樂寺及び八本渡河守河辺重馬成等不慮しく計略と

中會り道年二五人と分ち与へ龍と供又打置しむ下回龍
 心よりこい守に澤井堤のりり又出くく不徳田と刈せりけ時
 小田方の附城よりけ侍と見急ぎ信長の本陣へ進せしめ
 名守の雄の若武者刈田とる門後やうと進らしせとく二余
 人うけ出川城又向ふをのぞき見れば石山勢又百人計款乃来
 るも知らざる小や余念うく編と刈る老の方の林の中又南五
 阿彌陀佛の名号書し白旗二流松風又龍馬指物など
 本の間又きうめきこれに扱ひ伏兵と構へく田刈とるぞ藤忽白
 り不覚にうんとたわらふ一人の兵士とて出ていやく是
 る款の奇兵の術よく旗馬車と林の内又立並伏勢ありげと味
 方とまじはし其間又中々に編を刈せん計略之其機捷とて



南無

山



平持口
懐矣

画本信長記杖卷五

九一

多れりは伏兵を構へて敵を討んと欲する者の旗と上げ馬車
 を置く理伏の地と欲し知る者ありやらの林の内は軍兵二人
 をあつてはす魁もあつて川を渡し退拂ふて附入が親寺と宗寺や
 といふと多しとやうなる人、突くとやといふと、川と折渡さんと
 ても綱のひ繩り進んともなるを、又一人の武者押してめてや中
 いやしく是の門後勢の深きも樹かたし、其れいえ素家宗の御
 寺傍北日と云ふと、さう藤城小いとも兵糧と事と云ふと、
 志剛回より、味方の勢と物かえん計策も必定せう、櫻り又川と
 渡して後悔は、強ひるといふ種も何とま是も理りなりと、この
 深渡し、さう間も石山勢十分、回を刈多し、牛も牽せ馬も馳せて
 寺中へ入る、この志剛、信長乃知と云ふ、依り内務、村中

守林、三郎、兵助、福富、平左衛門、村三、平陽、後、其、助、等
 三子、余、誘、先、と、多、い、証、来、り、か、く、と、見、る、よ、り、と、く、の、論、も、及、び、
 馬と川中へ、門と折入、我後、と、渡、さ、り、は、附、林、の、中、を、り、白、旗、
 めき、出、門、後、の、軍、勢、も、衆、寺、八、本、後、河、守、河、辺、を、馬、兵、二、三、余、人、川
 端、の、境、へ、い、つ、と、押、垂、び、な、挺、計、の、鉄、炮、を、つ、ら、ん、小、回、勢、の、中、渡、る
 を、見、と、は、し、二、日、よ、り、と、折、入、せ、た、ま、り、も、敵、に、三、百、余、人、折、倒、さ、
 て、流、さ、さ、り、こ、い、う、小、と、漂、ふ、石、山、勢、は、小、周、と、櫻、り、槍、先
 を、搦、入、実、来、り、依、依、り、内、務、の、村、中、守、槍、を、た、て、味、方、と、折、さ、
 り、た、者、も、進、や、人、一、揆、あ、り、後、と、見、せ、誰、も、面、と、合、は、さ、
 や、く、と、な、り、門、と、差、先、よ、馬、と、牽、出、り、近、寄、敵、二、十、誘、計、川、の、
 斬、落、し、噴、き、よ、噴、ひ、て、搦、合、を、小、さ、り、川、と、推、渡、り、討、討、

日本書紀卷之六



本紀
新田



門火をとりし務と削て戦ひつる川深きと刀久ざりけり
 爰より山勢の中より黒草威の羽丸の獲を著し柘敷の懸を
 猪首と名はしぬのまより巨尾の余の大薙刀とありし時源太と
 名乗理村城中守と目づけ一文を討てり柘敷村にけ日の出ま
 先ぬりの具足と鉄鎧の満小のつけ大羽の槍と叱くときど
 紫毛の馬と躍らせやさきと武士が妙法なる海老本三乃
 びく首をて極樂へ植せとせんいと来れとく突出た槍の穂先を
 ひらりと拂ひ一往一素の縁を渡し火あまのれと頼へつり柘敷
 兼強勇のふ垂るしが徳田が振込長力を二三度にも度透ると
 が躍りよのく長刀を門と打ち落しつりぬ槍先目よりんせ
 と源太が眉を突通し終る首をぞえつりつる叔首とち力と黄

き後者も持せ味方の陣へ引込る石山勢の内より大者もて
 そと引給ふと柘村及紀伊國難波の役人志摩とに即刃系や
 さんと呼まのく十文字の槍打ちつり一系に突来るを城中守尾
 目よりん何の槍しと於縁とぶき忽ちと槍をうくと合とんや
 せん透回く電光のどくす討計し戦ひしと柘村強勇とと
 ども先よりの悪戦よ力敵と志摩が槍先と文外し胸板とを
 と突通され爰も命と落しつる志摩とに即そ首とえつるに
 とげ小田方も勇猛の守へつる柘村城中守と志摩とに即討
 えつりともつくと呼らわぶ小門後勢競ひつり後横を
 切まれ小田勢たまりつりつる津丹境を東の方へ崩さて
 とらぬ喰ともつくと追討し斬立と小田勢討ら若敷とと

退のり口のりたるのりののりとのり久のり又のりなるのり

國本信長記初卷五

九五

增中拾遺信長記初篇卷之三又終

